

新たな不登校が生じない取組 「未然防止」の取組

不登校が生じない魅力ある学校・学年・学級づくりの推進

【取組1】(A中学校)

A中学校では、今年の学校スローガンである「毎日行きたくなる学校」の実現に向けて、生徒一人一人が笑顔で過ごせる環境づくりを進めている。生徒が互いのことを思いやり、尊重し合える関係性を築くために各学級や各学年、委員会ごとに様々な取組を行っている。

●カジュアルデイ

生徒会の発案により、生徒が自由な服装で登校できるカジュアルデイの提案がされた。ただ自由というだけではなく、中学生としてのマナー、学校生活にふさわしい服装について全校生徒からの意見を集め、多くの生徒が納得のいく服装のルールを決めた。同時に、標準服や体操服での登校も認め、それぞれの生徒が自己選択し、自由な服装で登校するとともに、互いの考え方を認め合う取組となった。



●合唱コンクール練習

合唱コンクールでは、各学級の実行委員、パートリーダー、指揮者、伴奏者を中心に練習が進められた。事前に練習計画を立て、パート練習を重点的に行い、それぞれの生徒が苦手になっていることやうまく歌えない部分の課題を聞き取り、放課後に実行委員を中心とした会議を開いた。苦手の解消に向けた取組や練習の課題点を話し合い、翌日の合唱練習に取り組んだ。実行委員やパートリーダー等が主体となって、各学級の思いが1つになるよう、合唱曲を作り上げた。生徒が主体的に取り組んだ合唱コンクール練習により、学級・学年を超えたきずなが育まれた。

【取組2】(B中学校)

英語科の授業において、環境に配慮した物品を英語で紹介するという学習課題を提示して生徒が取り組んだ。各生徒が題材とする物品を自由に選択し、例となる文を参考にして生徒自身で物品を紹介する英文を作成した。生徒に選択の自由があり、それぞれの自由な視点で学習課題に取り組むことができた。

また、完成した紹介文を廊下に掲示することで、他の学級の生徒も自由に閲覧でき、互いに考えを認め合える授業となった。

【取組3】(C中学校)

不登校対応巡回教員による校内研修を実施した。不登校に対する考え方や不登校生徒への支援の在り方を研修の内容とした。不登校の未然防止に向けた取組を検討するとともに、生徒に寄り添った受容的理解の重要性、保護者への支援、外部の関係機関との連携について教員間で共有することができた。生徒・保護者・教員・関係機関が一体となり、多面的な考え方をもって休みがちな生徒の支援に取り組んでいる。

多様な学びの場を確保する取組

〔「早期支援」及び「長期化への対応」の取組〕の推進

支援会議（D中学校）

地域の民生委員を兼ねている校内別室の支援員が支援会議に参加している。欠席が長期化する不登校生徒への支援として、地域と連携して生徒及び保護者の情報を把握するようにしている。家庭訪問しても面会することが難しい場合には、SSW と協力して生徒の状況の把握に努めている。

アウトリーチによる支援（E中学校）

登校の難しい生徒に対して、学級担任による電話連絡や家庭訪問を継続的に行っている。さらに、欠席が長期化する家庭に対して、担任が把握している家庭状況を基にSSWや不登校対応巡回教員、家庭と子供の支援員による家庭訪問を行い、関係機関等での支援にもつなげている。

校内別室における支援（A中学校）

登校する意欲はあるが、学級等の集団への参加に困難さを感じている生徒に対して、校内別室での登校支援を行っている。校内別室では、校内別室指導支援員による学習の見守りを行い、得意な教科への授業に参加できる場合には一緒に教室に入る等の支援を実施している。また、教員が入室して信頼関係を構築し、学習意欲の向上を図っている。さらに、校内別室内での生徒同士のコミュニケーション活動や、支援員の得意分野を生かした手芸や工作活動、地域との交流など、学級以外での多様な経験の機会を確保している。



デジタル機器を活用した支援（B中学校）

欠席が長期化している生徒に対し、一人1台端末を利用して、面談を行い、授業の様子をオンラインで配信している。

また、校内別室の利用生徒で希望する場合には、オンライン授業を実施し、教室の様子を見せて、授業に参加する場合の安心感を得られるようにしている。

関係機関との連携（D中学校）

欠席が長期化している生徒について、校内委員会にて支援の方向性を検討し、必要な支援に応じて福祉、医療、児童相談所などと連携し、生徒の登校支援につなげている。

また、保護者の抱える負担や課題について、必要な支援をつなげ、生徒の登校できる環境を整備している。

成果

各中学校の生徒一人一人に合わせた登校支援により、継続的に登校できる生徒の割合が増えた。保護者、学校、関係機関が一体となり、支援の幅が広がってきている。

課題

支援を行うためにも、十分な生徒理解が必要である。生徒の実態に関する情報を集め、検討を重ね、チームとして継続的支援を行う。